

砂時計

創刊号



【創刊特集】 高校生の文芸

【特 集】 ふるさと創作

高校生の文芸

5

【エッセイ】 高校文芸を振り返る……………	6
【鑑賞】 高校生の文芸から……………	23
二〇一四年～二〇一六年……………	24
二〇一七年以降……………	35
【座談会】 『文芸部誌を語る』……………	39
ゲスト―青山ゆりえ・荒谷菜々穂 谷口 理文	

◆小説Ⅰ

シュガートースト……………	都築 なつ	60
道化師のリアリテイ……………	架城 巧	62
放課後のトマト……………	石山明香里	90

◆詩Ⅰ

一瞬／呼吸……………	音無 早矢	93
魔法の洗剤……………	きみどり	96
恩寵……………	安藤 涼香	98

◆俳句Ⅰ

凍死……………	都築 なつ	100
忘却……………	圓楽 斎	101
田舎にはお届けしないピザ〇ラを許すな……………	かくた	102

◆小説Ⅱ

霧の朝……………	鈴木 晴菜	104
じんせーるすまん……………	かくた	110
依る……………	飴屋 京	118

ふもと創作

【紹介&ふるさと創作】……………122

函館市／共和町／小樽市／札幌市
むかわ町／旭川市／釧路市

◎番外編

室蘭ドライブ吟行ツアー……………152

◆詩 II

連作 あい色の繭のなかで……………月野しほる
金魚……………飴屋 京
172 162

◆俳句 II

ほどほど……………音無 早矢

237……………八鍬 爽風

つれつれ……………村上 海斗

『砂時計』 俳句作品評……………浅井 通江

『砂時計』の俳句作品を読む……………五十嵐秀彦

◆短歌

僕らの花園……………安藤 涼香

「罪人になれ」……………てる

とかいでくらす……………鈴木 晴菜

K点……………村上 海斗

単作ほか……………音無 早矢

『砂時計』 短歌作品評……………山田 航

『砂時計』 短歌作品評……………田中 綾

◆同人紹介

◆編集後記

183 180 178 176 174

198 195 191 190 189 188 187

201

204

高校生の文芸

【エッセイ】高校文芸を振り返る

鈴木 晴菜・きみどり・都築 なつ・石山明香里
大江 翔太・林 佑・安藤 涼香・かくた

【鑑賞】高校生の作品から

二〇一四年～二〇一六年
二〇一七年以降

【座談会】

『文芸部誌を語る』

ゲスト——青山ゆりえ・荒谷菜々穂

谷口 理文

【エッセイ】

高校文芸を振り返る

わたしの「高校文芸」

北海道釧路湖陵高等学校校文芸部出身

鈴木 晴菜

自分の名前が書けるようになるまえから頭のなかは妄想だらけだった。小

学校でも中学校でもいつも小説を書いてきたから、高校では必ず文芸部に入ろうと心に決めていた。

高校受験当日、少し早めにその高校へ行くと、校門前に立っていた新聞記者さんに呼び止められた。

「高校生になったらなにをしたいですか？」

「文芸部に入りたいです」

「おお！ 小説を書くの？」

「はい！」

「桜木紫乃みたいな小説家になりたいって感じですか？」

「へ？」

ちょうどそのころ、我が故郷・釧路市は、釧路出身の桜木紫乃さんが直木賞作家になったという一大ニュースに湧いていた。わたしは無駄に空気を讀みがちな人間であるので、その質問に微妙な顔をして微笑むしかなかった。

「え、ええ、まあ、そうですね」

その翌日、新聞にはわたしの名前がしっかりと掲載され、記事内のわたしは「高校生になったら文芸部に入りたい。桜木紫乃さんのような小説家になりたい」と朗々と答えていた。呆然とした。桜木紫乃、読んだことないのに。

以降わたしは親戚だの同級生だのから記事のことを言われるたびに「あれは誘導尋問だった」と必死になって否定した。未だに桜木作品は読んだことがないのだが、恐らくわたしは一生「桜木紫乃に憧れる文学少女だった」という烙印に苦しんで生きることになるのだろう（桜木さんのことは純粹に尊敬している）。文芸部入部以降もたびたびこのネタで揶揄われることになるのだが、それはまた別の話である。

まあそんなことがあったのち、わた

しは釧路湖陵高校文芸部に入部したのだった。

女子だらけの部だった。入部当時男子の先輩はたったのひとりだけで、あとは全員女子である。その先輩が卒業してからは、わたしが文芸部にいた間は男成分が（顧問を除き）完全なるゼロだった。

そして総じて変だった。髪フェチの先輩、やたら即身仏を推す同輩、イギリスのEU離脱により半狂乱になる後輩たち、みんな変だった。部誌の特集のためと言って百物語を開催したり

（部室に塩を撒き散らして全員で震えながら帰った）ひたすら柿の種を貪り食ったりするのが日々の活動だった。顧問の先生に「おまえら気持ち悪いぞ」と罵られること幾年月、全員自覚があるので痛くも痒くもない。むしろ大爆笑だった。変人たちのゼリー寄せだった。その分、とても仲の良い部だった。ただし、部誌編集のときはいつも地獄だった。締切に追われ、編集に追われ、みんな日に日に憔悴し意味不明の

うわごとを呟き始める。喧嘩もよく起きた。がんがん意見をぶつけ合うわけではなく小さな声でぶつぶつと応酬するため、部内では部誌編集期間のことを「冷戦」と呼んでいた。部誌さえできてしまえばまたいつもの居心地の良い変人集団に戻るのの後腐れはなかったが、正直あの時期のことを思い出すとすると一部の記憶に霞みがかかって読み込みにエラーが起きる。たぶん脳が記憶の抹消を望んでいるのだと思う。そういうときは無理せず、自らの無意識に従うことにしている。

文芸部での活動は本当に楽しかった。けれど大変なことも多かった。それは部での活動におけるすれ違いだったり、創作に対する熱量のぶつかり合いであったりする。部活として文芸に取り組むなかで、文芸と人間関係は切っても切れないものであると痛感した場面も多々あった。人間関係が苦手だからと小説にのめり込んでいたわたしにとって、正直なところ、とてもつらい現実だった。何度も失敗して落ち

込んで部活を辞めたいと思った。けれどたったひとりで小説を書き、身内に見せて満足していただけの頃より、はるかに幸せは大きかった。そして同じだけ、初めての苦しみを経験した。

——たとえば、それは高文連。

今でも憶えている。初めての全道高文連のとき、小説で優秀賞をいただいた。天狗になっていたと思う、思い出すと恥ずかしくて爆笑しそうになる。知らない大勢に読んでもらうこと自体初めての経験だったし、しかもプロを含めた審査員に評価されたのだ。いろんな人に自慢できると鼻高々だった。典型的な嫌なやつである。

そんなわたしに、同級生のひとりが話しかけてきた。詳しい発端は曖昧だが、ざっくりまとめれば、わたしが高文連に出品する部誌製作にほとんど参加しなかったことへの指摘だった。

事実だった。否定できなかった。その頃は別の部の手伝いを頼まれていて、そちらを優先するあまり文芸部にはあまり顔を出さなかった。わたしは編集に携わらないまま、個人の作品だ

けはしつかり仕上げた。けれど指摘した彼女は、文芸部の活動に休まず参加し、編集に追われながら作品を完成させていた。前述したとおり、部誌の編集は困難を極める。あたりまえの不満だと今思い返しても思う。

彼女は途中から泣き始め、わたしも呆然としてしまつて、気付いたら泣き出していた。「わたしただの屑じゃん」という思いに囚われて目の前が真っ暗になった。部になんの貢献もしていないくせに、自分さえ良ければそれでいいのか。なにを喜んでいたんだろうと思つた。いただいた賞が自分の性悪さを象徴しているような気がした。彼女とはその後無事に和解したのだが、今でもあのときの衝撃が忘れられない。そのときからわたしは、自分の成功を純粹に喜ぶためにも、部内のことには真剣に向き合おうと心に決めた。

もうひとつ忘れられない思い出があつて、よく考えるとそれも高文連関係であるから、高文連は創作に入れ込む高校生にとつての天国でもあり地獄

なのかもしれない。そのときわたしがいたのは高文連東北大会・短歌部門の会場であつた。参加者は事前に短歌を一首提出し、それらは参加学生による人気投票と、評者である歌人の先生によつて二通りの順位付けが行われるという趣旨だつた。ちなみに学生投票のほうは、票を入れる際にその短歌を選んだ理由を併記するため、そのワークショップの最後にほかの学生からの、自作に対する感想がもらえることになつていた。

テーマは「文房具」。わたしの作品はたしか

あのとときの沼みたいのが出るで
しょう緑チューブを押し潰してる

だつたと思う。学生投票による上位三作品には選ばれなかったものの、歌人の先生からかなりのお褒めの言葉をいただけたわたしは、もうそれはそれはほくほくしていた。プロの先生に名指しで褒められるのは、やはり感動もひとしおであるから。そうして、ほかの

参加者からの感想の用紙をもらおうと、なんの疑いもなく受付の方に声をかけたのだ。

「湖陵高校の鈴木ですが、感想の紙をください」

「鈴木さん……あれ、ありませんね」

「え？」

「残念だけど……」

投票されなかつたみたいだね。受付のお姉さんの悲しそうな微笑を見ても、わたしはしばらく状況が掴めなかつた。

ほかの生徒からの感想がない。

……つまり、学生からの票が、ひとつも入らなかつたということだつた。

数十人の参加者がいたのだ。みんな同年代で、短歌が大好きな人たちだつた。その全員に見向きもされなかつたという、純然たる事実だつた。わたしの短歌に目を止めてくれたのは、歌人のその先生、ただひとりということにほかならなかつた。嬉しさ一色だつた頭の中が一気に渦を巻き始めた。

プロに褒められるのは、とても嬉しいことだ。けれど、大勢の同好の士に

は認めてもらえなかった。たったひとりに「好きだ」と熱烈に言ってもらえることと、大勢から「いいね」と言ってもらえること、いったいどちらが幸せなのだろう？ わたしはこの状況を喜ばしいのだろうか、嘆けばいいのだろうか？

——今となつては、創作をするなかでは当たり前起きることであると理解できる。ただしその頃のわたしは、すべての人に良く見られる出来の作品を書きたい、そんな思いで創作に取り組んでいた。だから、同時に襲ってきたこの幸福感と絶望感に、心が引き裂かれそうになっていた。

ふらつく足取りで会場の外へと戻って、経緯を説明しながら最終的に泣き出したわたしを、普段わたしたちのことを「変人」「倫理観がねじ曲がっている」と散々言う顧問が珍しく真剣に慰めてくれた。

「おまえの書くものは、残念ながら一般受けはしない。でも好きだと言ってくれる人は一定人数必ずいる。ファンを少しずついいから増やしていきな

さい」

その言葉が現在のわたしの創作理念になつているのは間違いないと思う。おそらくわたしは、読者の誰をも楽しませる作品をつくるだけの力量は持っていないのだろう。それを自覚した状態で、それでもわたしは、自分の作風を貫いていくと、そのとき決めた。この経験がなければ、わたしはいずれ自分の作品が大衆に受け入れられないことに不貞腐れて筆を折っていただろうから（なんでも人のせいにするのはわたしの悪い癖なのだ）、やはり高校文芸を経由したことは確かな利益だったのだろうと思っている。

まあ、作風を貫こうがなんだろうが技術は必要であらう。稚拙さを「これが俺の作風」と開き直るのはちよつと違うのである。

——さて、そんな日々を送り、部を引退し、顧問からの「この部は変なやつらしか入ってこないが、歴代トップは間違いなくおまえらだよ」という有難い言葉を胸に、ついにわたしも大学

生になった。生まれ故郷を離れ、大都会東京でのひとり暮らしである。

なにせもとから人見知りなので、なにか文芸同人に所属するまでの勇氣はなかった。これからはまた、高校入学前のさもししい「ひとり創作活動」に従事していくことになるのだろう。大丈夫、高校文芸を知る前に戻っただけさ。締切に追われることもないし、心もいくらか楽だろう？

そう自分に言い聞かせながらぼんやりとスマートフォンを眺めていたわたしのものと、ある日一通のメッセージが届く。

『高文連のメンツで合同誌を出しませんか？』

「まじで言ってるの？」

わたしの「高校文芸」に、まだまだ終わりは見えそうにない。

文芸部で培ったもの

北海道釧路湖陵高等学校文芸部出身

きみどり

あいすくりいむというもの

これはみごと、なんとふしぎなものなのだ！

白くてかたいのに、

口に入れるとふんわりとける

西洋の文化とは、まことにおそろべきものだ

だがこのあいすくりいむ、
少しばかりたいへんだ

なつは、

たいようさまのせいですぐにとけちまう

あいすくりいむ屋もそんなことはつゆ
しらず

となりの店の、むすこの友だちの
さらに友だちから聞いた話だが

たいようさまの真下で

あいすくりいむを売っていたものだから

ぜんぶとけちまったんだってさ！
いやいや、こっけい、じつにこっけい

私の所属していた高校の文芸部は、物書きをする小説班と、小説の挿絵やイラスト、リレー漫画などを描くイラスト班に分かれている。私は幼い頃からイラストを描くことが好きだったため、イラスト班として文芸部に入部した。と言っても、必ずどちらかを選んだ担当しなくてはいけないというわけではなく、部員の中には小説にもイラストにも取り組む人もいた。

そんな私たちの活動は、年に二回、夏と冬に発行される部誌にまとめられており、作品は各々が好きなものを選び作成する。私はイラスト班として小説の挿絵や個人イラスト、リレー漫画はもちろん、一年生の頃は短歌と詩、

二年生からは更にリレー小説にも挑戦した。それまで短歌や詩、小説は授業の一環として作成したことしかなく、部誌にまとめる前に部員全員で批評はするものの、全くの素人である自分の作品を公開することには少し抵抗があった。その抵抗がなくなつたのは、高校二年生の頃に、高文連の北海道大会の詩部門に作品を提出し、批評をいただいたときである。そのとき私は「夢」「大きな木」「あいすくりいむ」というものという二つの詩を提出した。この中で私が気に入っており、直接詩人の方に批評をいただいたのは「あいすくりいむ」というものという詩である。内容は次の通りである。

ありたちが、れつを成して食べに来た
そうだ

ふゆは、

さむさのせいで腹がひえやすくなる
あいすくりいむ屋もそんなことはつゆ

しらず

となりの店の、むすめの子どもの
その友だちから聞いた話だが

さむざらの下で

売れのこったあいすくりいむを食った
ら

一つきのあいだ

はらいたでねこんだんだってき！

いやいや、こっけい、じつにこっけい

ゆきさまたちが、

ゆびをさして笑っていたそうだ

おや、今日もこりずにあいすくりいむ
屋

たしかにうまいがちとたいへん

西洋の文化とは、まことにおそろべき
ものだ

この詩を作成した直後、私が今まで

書いていた人の気持ちをつたうものと
違い、物語のような構成を気に入った
と同時にたしてこれは詩と言えるの
か不安になった。そのため、初めは提
出することを迷っていたものの、部員
同士での批評の際に提出してみると、
思っていた以上の評価をいただき、背
中を押され、高文連の提出作品とする
ことを決めた。そして高文連にて詩人
の方から直接批評をいただくこともで
き、とても有意義な時間を過ごすこと
ができた。このとき私は、批評をいた
だくうれしさ、自分の作品が成長する
楽しさを感じた。

それ以来、私は暇を見つけてはたく
さんの作品を作り、文芸部の仲間や時
には文芸部でない友人にも、自分から
作品を公開するようになった。そして、
それまではなんとなく作っていた作品
も、読み手に何をどのように伝えたい
かを考えて作るようになった。

文芸部の仲間に支えられ、多くの方
に批評をいただいたことで変わった考
え方。これは、私が高校生で、探さず
とも仲間を見つけ、お互いに高め合う

場、作品を発表する場が用意されてい
たおかげであると感じている。忙しい
部活と兼部していたために文芸に携わ
る時間は他の仲間比べて短かった
が、それでもたくさん作品に触れ、
自分の作品に活かせるような知識を得
ることができたと思う。

まだまだ成長途中の私だが、私の基
礎を作ってくれた高校時代の文芸部の
仲間たちには、感謝してもしきれない。
高校を卒業し進学してからは、文芸系
のサークルがないために文芸とは疎遠
になっていたので、たくさん作品に
囲まれていた高校時代を思い出し、ま
た多くの作品を作っていきたいと思
う。

ぶんげいとわたし

北海道小樽潮陵高等学校文芸部出身

都築 なつ

こんにちは、都築なつと申します。朝食に醤油ごはんを食べる限界JDです。エッセイをまともに書いたことがないので、どう書き始めたものかと迷っていますが、とりあえず書いてみます。

私が文芸を始めたのは高校で文芸部に入ってからでした。中学の時の先輩がいたからとといった軽いノリでうっかり入ってしまった訳ですが、今こんなにとっぷりはまることになるとは思ってもみなかったです。先輩に感謝。元々本を読むのは好きでしたし、小学校や中学校の授業で作った短歌やら俳句（川柳）が褒められたこともしばしばあったので、「できるかなあ」よ

りは「やってみたいー」の気持ちの方が強かった記憶があります。

が、やってみるとこれがなかなか難しい！ 一番初めに書いた小説はちよつと出来が酷すぎて、破いて燃やして灰を海に撒いて叫びながらおうちに帰りたいぐらい恥ずかしいです。の

で、その小説の紹介は割愛します。

高校文芸で最初の作品、というところには話は戻りますが、私の他に一緒に文芸部に入った同年年の人が三人おりまして。彼らの作品を読んだ時に、衝撃を受けたのを覚えています。すげえ、同じ年数生きてきてこんな違うものか、すげえ、って思いました。これはちよつとあまりにも語彙力ないで

すけど、本当にびっくりしましたし、ちよつと泣きたくなりました。当時で泣きたいくらいですから今はもつと泣きたいです。本当にあれ燃やしたい。

まあそれはともかく、すごいんですよ、うちの文芸部（唐突に自慢が始まって申し訳ございません）。私たちの代もそうですけど、先輩も後輩ちゃんも。すごく刺激を受けましたし、それによって今の私の作品があるのだと思います。

それじゃあもつと具体的に作品のお話をしようかなあと思います。

一年生から二年生の前半あたりまでは、とりあえず色々やってみようという意識が強かったような気がします。それから段々と今のかたち、小説と俳句にしばらくたっていったような気が、します。正確にいつからこれを頑張ろうと思いはじめたのかは正直覚えていないんですけど、まあ、いつの間にか。俳句は割と二年生の初めあたりから真剣にやろうとしていた記憶があります。というか俳句手帳にその跡が残っていました。小説は、やっぱりみんなみた

いに書きたいっていう気持ちが強かったです。

一応、その私の気持ちとか努力とかは実を結びました。ここからまたちょつと自慢ゾーンですけど、初めて賞をいただいたのは二年生の時の高文連だったかと思います。たぶん。今ちよつと手元に資料がないので確認できないんですよ、全部実家に置いて来ちゃって。私の記憶が正しければ、その時の俳句が最初です。

スカートをはいて北窓開きけり

です。です。なんです。なんだか懐かしい気がします。遠い昔に送り出した子供が久しぶりに帰って来た気分です。子供いないのでちよつとわからないですけど。

生きてきて初めて自分の作品を評価されたので、すごく嬉しかった覚えがありますし、そのあたりから自信も少しずつついていったような気がします。

それから文芸部の部費アップのため

に、ろくに勉強もせずに部活に打ち込む日々が始まるわけですが。うっかり部長にもなっちゃったんですよ。なんでも私になつたんだっけ？ 記憶がないです。今でも私で良かったのかなあとか、ちゃんと文芸部のためになれていたかなあとか、思い出します。ただ、四六時中文芸部のことだけ考えていたのは間違いないです。天敵だった日本史の先生に呆れられるくらいには。

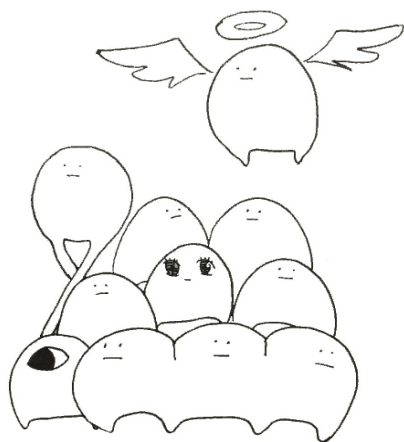
そういえば、高校の文芸部のことを考える時に一緒に思い出されるのが、三年生の時の高文連です。前述した通り、高校生の私は俳句を結構頑張っていたわけですが、小説もちまちまやっていた。が、最後の高文連の締め切りもいよいよ近いという時、小説が全く出来上がりませんでした。いわゆるスランプ的なやつですかね。だったら私、年中スランプのような気がするんですけど、まあそれはともかく。本当に諦めかけました。「無理！」って五万回ぐらい言ったかもしれせん。27時間テレビ見ながら書こうと思つて、書いたけどそのあと全部消して結

局ただオールしただけになったりもしました。

そんな時に部員にすごく励まされたのを覚えています。まあ、私がいまだにううだうだしていたから仕方なく、かもしれないですけどね！ そのおかげで何とか書き上げることができました。「ある街の片隅で、」という小説です。賞もいただくことができました。私の小説を待つていてくれてありがとうございます。ううてめっちゃめっちゃ思いましたし、今も思っています。ありがとうございます。

でも実は、そんなぎりぎりですら完成した作品が評価されたことは当時全く納得していなかったです。ですが、大学の先生に「ギリギリで頑張れる力って大事だよな」みたいなことを面談の時に言われたので、今はまあ良かったのかなあ、と思っています。そのギリギリはレポートの話なんですけど、まあ似たようなもんですよね（違う）。さて、なんだか色々書いた気がしますが、たのしんでいただけでしょ。うか。エッセイって自分の話なので、

愉快な人間ではない自覚がある私が書くのは不安でしかなかったのですが。そういえば、もしかしたら若干名が知っているかもしれない、私が文芸部の神になる話があるのですが、それは私自身が覚えていないので割愛です。読んでいただきありがとうございます。



×切の当日に書いたエッセイ

北海道札幌北高等学校文芸部出身

石山明香里

高校時代は小説と俳句がメインだったが、その他にも短歌、詩、エッセイ（途中で挫折したが）と様々なものに手を出した。エッセイを書くとした際、顧問にエッセイとは新聞の卓上四季のように最初は違う切り口から入り、その後本題、自分の伝えたいことにうまく繋げるようにして書くといくとアドバイスをもらった。そこが難しく当時の私は途中でやめてしまったのだが、今こうしてエッセイを書いている。果たして違う切り口から入れているのかと言えど答えは否だ。そんなエッセイが苦手な私だからこそ変に飾ることなく徒然なるままに書いていくと思う。

私は小説を書くために文芸部に入っただが、最初の部誌の締め切り前に先輩方に詩、短歌、俳句も書くようにと言われた。詩、短歌、俳句なんてわからないとひどく慌てたものだが、出来はともあれなんとか書いて出すことは成功した。そこで調子にのったのか、はたまた他の部員に倣ったのかその後にあつた大会に短歌を出してみようと思いついた。しかし大会に出すにはこれまで書いた短歌だけでは数が足りず、中学の国語の時間に書かされた俳句に七・七を付け足して短歌として出したのである。その結果顧問に俳句の方が向いているのではと言われ、あつさりと俳句に転向した。

小説と俳句がメインだと言った。しかし俳句は最後までわからないままであった。良い悪いは読み手の好みに影響されやすい、と少なくとも私は感じた。それならば自分の思うままに詠めばいいような気もするが、分科会に出れば何か意見を言わなくてはならない。二年の全市大会では賞をもらえたのが俳句のみだったため、全道大会には俳句部門で参加しなくてはならなかったが、その分科会で殆どなにも言えず、非常に盛り上がりなかったのを覚えている。私の中では俳句はノリで書くものであったし、自分が満足するものが良い俳句だったのである。

詩は一番苦手であった。前述の三種類もマイナス面が多かったが、それの比ではないくらい詩は苦手であった。三年間を通して書いたのは二回だけである。詩と言えば私の中では金子みすゞさんである。「みんな違ってみんないい」と言えば誰でもわかるだろう。詩を書くかと思いついた時の私は、それを目指して書くとした。少しリズムミカルに、一つの伝えたいことを軸

にして書けば良いと。その結果出来上がったのが「みてみてまっかつか」から始まる詩である。紅葉についての詩で、最後に紅葉の明るい色は、寒さへの抵抗なのではないかということを書きたいこととして書いた。リズムミカルに書けたし、なかなかいいのではと満足して大会にも出したが、他の方々の詩と並ぶと私のものだけ一つ明らかに浮いていた。誰も私のようにリズムミカルで子供っぽい詩は書いていなかったのである。

さてここまでの振り返りで随分と長くなってしまったが、最後に小説についてを書くかと思う。小説は間違いく三年間で私が一番力を入れたものだ。ジャンルとしては歴史、スポーツ、ファンタジー……色々なものに手を出した。中でも水泳部に所属していた私は水泳小説を多く書いた。自分にしか書けないものを書きたかったのかもしれない。私自身はストーリーよりも描写に力を入れている方である。というよりもストーリーがありきたり、またはヤマもオチもないようなものしか作

れないため、その分を描写でカバーしようとしている。描写から伝えられることは多くあると思う。例えば「甘い味がした」と「甘ったるい味が舌に残った」ではその人の感情に差があるように感じられないだろうか？ 後者の方は少し苛立っている、苦々しく思っているなどマイナスなイメージになる。上記のように心情を直接書くのではなく、情景から遠回しに伝えるという書き方に一時期はまっていた。またその物が持つイメージを利用したこともあった。例えばチョコレート味とソーダ味では後者の方が爽やかなイメージになる。このイメージでキャラの性格の差を表したり、心情を表したりした。あくまでやるうとしたという話で、実際にできていたかという点と頷くことはできないのだが、ともかくもそういう努力をするのはとても楽しいことであつた。また私は風景の写真を撮るのを趣味としているため、旅行に行き写真を撮り、その写真を見ながら小説の舞台を決めたりもしていた。これもとても楽しいことで、当時は書きたいと

Document

北海道大麻高等学校文芸部出身

大江 翔太

いう感情のままにあらゆるストーリーのものを楽しみながら自由に書くことができていた。しかし最近はどうだろうか。今こうして文芸活動をしながらも、ストーリーには毎回困り、締め切りの当日にならないとパソコンを開かないということがよくある。自由にどこか人に見られて恥ずかしくない、素敵だと言われるようなものにしなければと思うからなのであろう。これは成長しているということなのかと思いつながら、人に誉められることしか考えられなくなったら終わりだなとも感じるのである。小説も徒然なるままに書けるようになっていたいものだ。

多くの詩作は基本的に、一作品にかなりの時間をかけます。しかも、完成できなかった作品をそのままにしておいて、半年後に改めて書きはじめるということもあるのです。

そんな多くの高校文芸の思い出といえば、高校三年のときの高文連の全道大会です。ぼくはそのとき、詩の分科会（同じ創作ジャンルのグループ。このグループごとに合評をしたりします）に所属していました。多くの作品も石狩支部大会で入賞していたので合評対象でした。

その分科会の課題でぼくたちは「海」をテーマにした詩を書きました。しかし、この課題は発表された翌日が締め

切りだったのです。

一日で作品を完成させる——そんなことをしたことは一度もありませんでした。

さらに、テーマである「海」はぼくにとつて馴染みのないものでした。ぼくは山に囲まれた町の出身で、海をちゃんと見た回数は海がテーマである詩を読んだ回数よりもずっと少ないのです。

結果的に、ぼくは海を具体的な形ではなく、象徴して扱うことにしました。海の永遠性に注目して、そこから作品の永遠性を表現することにしたのです。

どうしてそんなテーマで書くことに

したのかといえ、北海道立文学館で行われていた宮沢賢治の特別展を見たことに関係しています。ぼくたちは分科会で行った「文学研修」で文学館を訪れました。

特別展には『グスコブドリの伝記』を中心に、賢治と自然との関わり、そして彼の法華経の思想などを展示していました。

そこでぼくは賢治の創作物や思想が、今も生き続けていることを知ったのです。さらに、賢治の創作物を基に新たな作品が生まれていることも再認識しました。実際、ぼくも賢治の作品に影響を受けた作品にたくさん触れています。

創作物はある種の永遠性を持っているとぼくは考えます。読者にとつては読んだことのない本は、新しい本も古典も等しく「はじめて読む本」なのです。作品は時間という概念から解放たれているとすら考えます。

ぼくはその永遠性を表現することになりました。創作物自体をテーマにするというメタ的な手法は、高校時代のぼ

くがよくやっていたことでした。時間がないなかで自分のやり慣れた方法を採用するのは当然と言えるでしょう。

それでも、そのメタ的思考から創作物の永遠性に着目したのは、確実に「文学研修」で北海道立文学館に訪れたことが影響していると言えます。

さらに詩には、主人公が書いた詩を小瓶に詰めて海に流すというシーンを書きました。この描写は自分の創作物が様々な人に届いてほしいという願いの表れです。

高校時代のぼくはより多くの人に自分の作品を読んでもほしいという思いがありました（当然、今もあります）。高校文芸の大会には多くの人から感想をもらうシステムがあります。「感想カード」を書くとその作者に届くようになっていのです。

高校一年のときに自分の作品に「感想カード」が来たとき、とても嬉しかった記憶があります。読者の感想がくるシステムがあることは多くの創作の大きなモチベーションになりました。それはインターネットの小説投稿サイト

などにはない距離感だったのです。

詩でそのような表現をしたのは、ひとえに多くの作家であり読者である高校生が集う高校文芸の場であつたからなのです。

一日で作品を完成させるということ、は、そのときの感情や思想を一瞬で真空保存するようなものです。そうやって書いたものは、長時間かけて創作するときにはない質をもった作品になります。ぼくは高文連のときにはじめてその良さを認識したのです。当然、時間をかけた作品にも別の良さがありませんが、確実に自分の創作の幅が広がったのです。

高校文芸の場で活動したことで、多くの創作の方法や姿勢は大きく変化しました。また、多くの刺激的な出会いがあり、〈北十〉に所属している今でも続いています。

そんな高校文芸の場に、ぼくはとても感謝しているのです。

作品との出会い

市立函館高等学校文芸部出身

林 佑

りと守っているという印象を持っていた。そして青春のような何かとか、あの日の思い出みたいなのかがだらだらと続いているようなものだった。たとえば、

古ぼけた写真を手にしつづやいた
ごめんの声を消す交差点

林 佑

私にとっての高校文芸は、「人」と「作品」との出会いの連続であったと思う。特に、作品との出会いは私に大きな影響を与えた。

部活内での作品の会合は限られていた。というのも、入部当初、部員は少数であったため出会える作品の数は限られていたのだ。

そんな私がたくさん作品と出会えたのは、大会という場のおかげであると思う。他校の文芸部や講師の先生と話をしていくうちに、自分の作品を再度見つめなおすことができた。

中でも特に印象的であった大会は二〇一四年の高文連の全道大会である。函館に引きこもっていたら、決し

て出会えていなかったであろう作品と出会えたのであった。当時高校一年。

やきそばのぬめりをぐいっと拭き
取ってあしたってないよね？ と
耳打ち

初谷 むい
(初谷さんは、現在歌人として活躍しているため、筆名とした。歌集に『花は泡、そこにいたって会いたいよ』(書肆侃侃房)がある。)

短歌部門の最優秀作である。この作品との出会いが私の短歌への向き合い方を変えた。それまで、短歌と言えれば「五・七・五・七・七」の定型をきっちり

なんともぼやけた、よくわからない歌。「あの日」とか「思い」のようなよくわからないものを想起させる。こんなものが短歌であると思っていたのだ。

その常識を変えた。間を取らせるような促音と空白、違和感のない句またがりに加え、上の句と下の句の印象の違い。文字だけで読むではなく、音としても読むことのできる歌であると感じた。

私はそれまで、目で見て読むことしか意識してこなかったが、このとき、声に出して読むということに覚えたのだ。

また、全国大会で出会った作品も、私を驚かせた。これも二〇一四年のことである。

食べらるるために食べをる牛に雪
広島県立広島高等学校 山崎 七海

こんなにも俳句を読んで、感動することがあるだろうか――。そう思った。自らが食べられることを知らずに、食べている牛。誰かが生きるために、自分が生かされていることなど知らない。

この句は当たり前の情景を切り取ったに過ぎない。しかし、当たり前のことというものは、普段しつかりとみていることができないものであると言える。自分の創作の姿勢の目標となった。先輩世代の作品の影響だけではない。同期の作品にも影響を受けた。

「ふらここで私の陰はばねになる
北海道函館西高等学校 松田 玲

1 ふらんこのこと。

同期の作品である。「私の陰はばねになる」という隠喩が、ふらここの勢いの良さを表している。比喩を使っていることによって、間接的に表しているように見えるが、直接的にも見えるような表現となっている。

そうした人と作品との出会いによって、文芸というジャンルの中で育ってきた。賞をいただくこともあった。しかし、私にとって、賞はあまり重要なものではない（もちろん光栄なことであるし、うれしい）。むしろ、重要なものは、作品を通しての人とのかかわりやつながりというものであると思っている。今でも高校文芸でかわった先輩や同期、後輩とつながりが続いている。この「北十」もそのつながりの一つである。突然の思い付きで始めたことではあったが、この場に本当に感謝している。

私にとつての高校文芸はまだ、終わっていない（もちろん高校文芸の実作者としては終わっているが……）。後輩から、俳句の選句やアドバイスを

依頼されることがあり、高校生の作品にかかわる機会が続いている。

私にとつての高校文芸の終わりは、高校生の作品とのかかわりが絶たれたときであろう。

そういう意味で、私の高校文芸はまだ、終わりそうにない。



▶ 二年生のときの全道大会の会場となった大沼

ひとつのゴール

北海道札幌旭丘高等学校文芸部出身

安藤 涼香

高校文芸は最高に楽しくて、それと同じくらい、辛かった。

人生最後の全道大会、閉会式のステージ中央に立って詩部門の賞状を貰いながら、これで終わりなのか、とだけ思ったのを今でも覚えてる。手に持った盾は、照明の輝きを受けて本当に美しく輝いていて、壇上の顧問は微笑みながら小さく親指を立てて祝福してくれた。自分が気に入る詩を書けたのは、嬉しかった。それがプロに評価されたのも嬉しかった。でも、あの詩を書いたときに感じた、これよりも素敵な詩はもう書けないかもしれないと

ちよつとしよっぱい。この本に文章を載せている人の多くにとって高校文芸は通過点なのだろうけれど、私にとってはゴール。進学後も物を書きはするが、それを賞に出したいとは思わなくなった。これも一つの趣味の在り方だ、と頭では理解していても、一度自分の作品での勝負を経験してしまった私にとってそれは、少し寂しい変化だ。

いう思いが、受賞の瞬間、確信へと変わってしまった。自分にとって最高の詩が、他者から見ても私の最高傑作になってしまったのだ。あの日以降も何本か詩を書いた。この本にも少しだけ載せている。それでも私の作品ではあの詩が一番で、もうあれ以上の詩は書けないだろうと思う。何せ私自身がそう思ってしまったのだから。人生最後の全道大会は何も特技がなかった私にとって最高の一日になった。でもその日は最高の一日であると同時に、私が私の限界を見た日になってしまった。だからこそ、高校文芸の思い出はろうとして挫折、制服姿でシャボン玉

や鉄棒をして帰った日。部誌の製本のために空き教室で指先を真っ黒にしな
がら帳合をした日。好きなものを好き
なように書いてお菓子をつまみながら
感想を言い合う、そんな日々が愛おし
かった。文章が上手で私に色んな世界

を教えてくれた先輩も、容赦ない批判
をぶつけあった先輩も、未だに背中を
追ってくれる後輩も、優しい笑顔が素
敵だった顧問の先生も。あの場所出
会った人たちのおかげで、今も細々と
物を書いていく。スランプに見舞われ
たこと、締め切り目前にデータが飛ん
だことなど、今では笑ってしまうよう
なハプニングから深刻な悩みまで、色
んなことがあったけれど、間違いなく
文芸部は私の青春だ。

普段の生活だけでなく、年に何度か
ある大会に参加したことも思い出深
い。私は高校文芸で初めて部活として
の「大会」に参加したため、知らない
土地に部活のメンバーと行けるとい
うだけで非常に嬉しかった。ホテルの部
屋で先輩と創作や将来について語り
合った一年目、作品や大会で行われる

文学散歩を通して知り合いが一気に増
えた二年目。三年目は地元での開催
だったため、冒険に行くかのような高
揚感は薄かったけれど、自分が三年間
で築いてきたものを総括するような大
会はとても有意義で楽しかった。

大学に入って課題に追われ、なか
か創作に時間を割けなくなっていた私
だったが、有難いことにこの度『砂時
計』に寄稿しませんか、とお声をかけ
ていただいた。高校文芸時代に憧れて
いた同い年の書き手が再び集まったこ
の本が多くの人に読まれること、そし
て廃部の知らせも時折聞く高校文芸部
がこれからも活気づいていくことを願
いつつ、この文章を締めくくろうと思
う。創作のアイディアと出会いをもた
らしてくれた高校文芸、そして『砂時
計』が素敵なお場であり続けますように。

◀一年生のときの大会開催地 洞爺湖



地方勢に向かない部活

北海道小樽潮陵高等学校文芸部出身

かくた

私の高校生活を振り返ると、部活動・

生徒会・登下校に全てが集約されるような気がする。部活は文芸部と名前の生物同好会。生徒会は校内の雑務をだらだらこなす委員会の担当。登下校は片道二時間、徒歩と列車の旅。ゆっくり一息つく時間も友達と街へくり出す余裕もなく、大して勉強もしないまま三年間は終わってしまった。

これら三つのうち、部活と生徒会による忙しさは問題なく耐えることができた。はじめる際に一癖はあったものの、自分でやりたくてやっているものであり、辛くなったらやめればいい、と頭の片隅であぐらをかいていられた

からだ。

しかし登下校となると訳が違ふ。田舎から志望して進学したとはいえ、長時間の移動を強いられ、いたずらに時間が削られていく。誰に怒りに向けてのが正解だったのか、未だに私はわからない。

いわゆる「地方勢」というやつだ。朝六時の列車で登校、小樽駅まで寝ていく。帰りは部活を早抜けて十八時の便に乗り、余市までは友達と喋って、その後は小テストのカンペ作り。家に着くと二十時、夕飯と風呂ですぐに二十二時。そこから宿題をして友達からのラインを返していると、日付は変

わり急いで就寝。また朝が来て、五時には起きる。部活の原稿を書く時間を私はどうやって作っていたのだろうか。

とにかく、特別頭がいいとか要領がいいとかでない限り、文芸部は地方勢に向かない部活だ。だいたい田舎の高校には文芸部がない。地方都市に出て、やっと一校あるかどうか。一つもない地域だってある。文芸部のある学校に受かって入れたとしても、十分に作品制作に打ち込めるものだろうか。

私は、なんとか頑張って地方都市の高校に進み運よく文芸部に入って、作品さえ出せば全道に出れるということ。で高文連に作品を提出した事が縁で、この雑誌の末席に加わらせていただいている。随分運のいいやつだ。願わくは、文芸に親しまんとする田舎暮らしの学生たちに、運が傾かんことを。